横須賀市博物館研究報告
(人文科学)
第7号　1963年3月

横須賀市けえね台出土の弥生式土器

神沢勇一

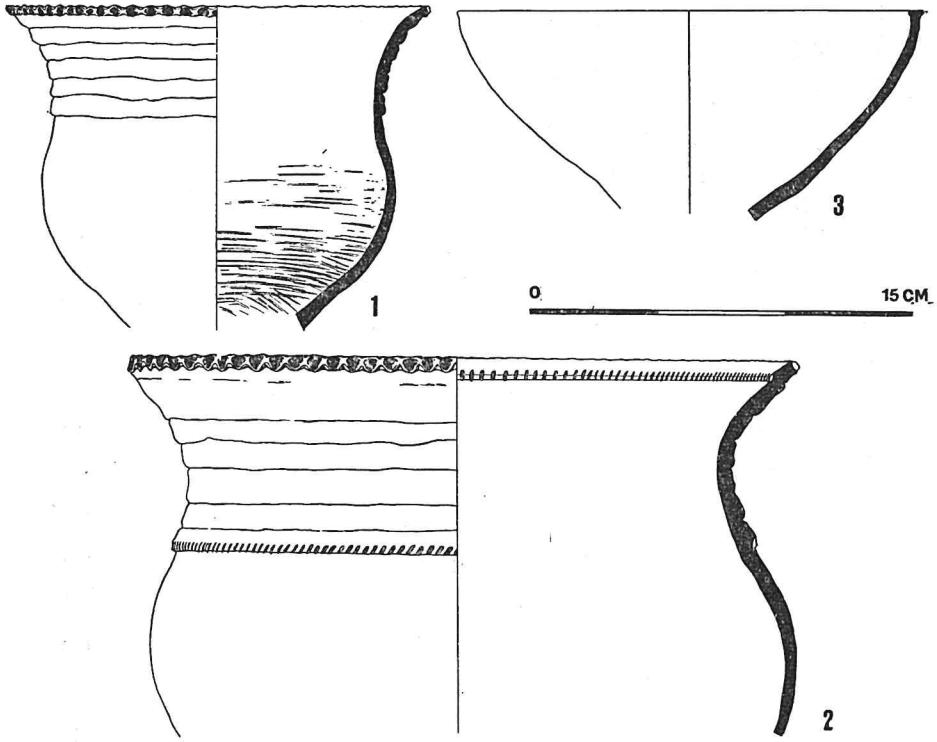
横須賀市衣笠栄町の通称けえね台とよばれる台地から、畑地開墾のさい、数個の弥生式土器が発見され、地主小暮鶴五郎氏から横須賀市博物館へ寄贈された。それらの土器は、ほぼ器形を察知しうる三例を除き、大部分が小破片であるが、一括的状態で出土したことが知られている良好な資料であるので、簡単に報告しておきたい。

けえね台は、久里浜から葉山へ走る地溝帯の北縁をなしている丘陵の一部分で、枇杷山遺跡(註1)の東南三〇〇mに位置し、標高は約五〇mである。土器の出土地点は、かつて稲荷社(けえね稲荷)のあった、台地の頂部付近で、土器は表土(黒色土)下三〇cmにある褐色土層の上部から出土したが、一m×一・五mの焼土の周囲に、ほぼ同じ深さで散在していたと言われる(註2)。この焼土が住居址内の炉であるか否かは確認できないが、土器の組成や出土状態などからみて、その可能性が多い。

出土土器の個体数は六個体(確認しうるもの)で、器形別個数は甕形土器三・浅鉢形土器二・壺形土器一である。

遺跡位置図

甕形土器――――1(挿図1)＝胴下半部以下を欠失している。現存高一二・五cm、口縁直径一六・五cm、口辺部と頸部は粘土紐を六段積みあげて装飾的に形成され、口縁は複雑な小波状を示す。器面は篦で整形されるが、粘土中に小石の含有が多いため、粗である。焼成は悪く、色調は灰褐色を呈する。2(挿図2)＝胴部以下を欠失している。現存高一六cm、口縁直径二六・六cm、口辺部は前者と同じく装飾的な輪積手法によっており、口縁の部分だけ粘土紐を内側に一本貼付けて形成している。口縁はきわめて複雑な小波状になっており、口辺内面と頸部下端に刷毛状器具の先端による連続した押捺がある。焼成は良好で、色調は赤褐色を呈している。なお、もう



一例の甕形土器は、同一個体とみられる破片数個で、本例と酷似した形状を有するものである。

鉢形土器――――1（挿図3）＝底部を欠失している。現存高八・四cm、口縁直径一八・四cm、器面は篦で粗く整形され、口縁上面に細かい縄文が施文されている。材質は粗悪で小石の含有が多く、加えて焼成が不十分なために脆い。色調は淡褐色を呈する。他の一例は、口縁部外面に細かい羽状縄文帯が一列めぐらされている破片である。これらは或は脚を有するものであるかも知れない。

壺形土器――――同一個体に属する大形の壺形土器の破片が数個あるが、特徴的部分を欠くため、詳細は不明である。

けえね台出土土器の概略は以上のとおりであるが、これらの土器は一括的な出土状態と器形・文様上の諸特徴から、すべて一時期の所産と見なしうるものであり、南関東地方における弥生文化後期初頭に編年される久ケ原式土器に属するものと考えられる。

註

（1）川上久夫「相模枇杷山出土の弥生式土器」考古学集刊第一冊（一九四八年。

（2）地主の談話、ならびに赤星直忠博士による現地調査の結果による。

（日本考古学協会）